

〔論文〕

# ベン・シャローム・バーナンキ

土井省悟\*

## — 目次 —

1. はじめに
2. バーナンキの経歴
3. バーナンキの著作活動
4. バーナンキと学者仲間（学問共同体）
5. おわりに

## 1. はじめに

2006年2月1日、ベン・シャローム・バーナンキ（Ben Shalom Bernanke）が、グリーンSPAN（Alan Greenspan）のあとを受けて、第14代連邦準備制度理事会議長（Fed議長）に就任した。本稿は、バーナンキの経歴をつかむことによって、"Who is Ben Shalom Bernanke?"という問いに答えようとするものである。

## 2. バーナンキの経歴

### (1) 家族

ベン・バーナンキ（「ナン」に強勢がある<sup>(1)</sup>）は、1953年12月13日に、薬剤師の父・フィリップ（Philip）と学校の教師である母・エドナ（Edna）の3人の子

---

\* Shougo DOI 社会学部教授（応用社会学科）

供の長兄として、ジョージア州オーガスタ (Augusta) で生まれた。4 ヶ月後には、家族は、サウスカロライナ州のディロン (Dillon) に引っ越した<sup>(2)</sup>。ディロンがバーナンキの故郷 (hometown) である。

バーナンキと彼の妻、アナ・フリードマン (Ann Friedmann) の祖父母は4人とも、第一次大戦の前後にヨーロッパからアメリカ合衆国に移住してきたユダヤ人である<sup>(3)</sup>。バーナンキの祖父ヨナ (Jonas) はオーストリア皇帝F. ジョーゼフ軍の軍務を終えたあと、オーストリアからアメリカに移住してきた。彼は独力で学校を出てニューヨーク市のイーストサイドで薬剤師となった。彼は、彼が勤めていた薬剤店の所有者からその店の購入に必要な1000ドルを借りて、それを頭金にして残りの代金は将来の利潤から支払うという約束で薬剤店を購入した。当時の移民がそうであったように休みなく働き、その結果、ニューヨーク市周辺に数軒のドラッグストアを所有するようになった。最後は、ディロンに店舗を購入してそこに落ちついたのである。バーナンキが、生後4ヶ月でディロンに引っ越すようになったのは、彼の父・フィリップが、かつて祖父がニューヨークの薬剤店を購入したのと同じ方法で、ディロンにある祖父の店を購入したからである (Bernanke[2004])。

## (2) SAT

バーナンキは、幼稚園ではすでに本を読むことができたので、小学校は2年生からはじめることになった。小学校6年生の時にはサウスカロライナ州の「単語のスペル当て大会」(Spelling Bee) で優勝した<sup>(4)</sup>。高等学校ではオールAの成績であり、1971年の進学適性検査 (Scholastic Aptitude Test: SAT) では1600点満点の1590点を取り、サウスカロライナ州で1番の成績であった。その賞品は、費用全額支給での2週間のヨーロッパ旅行であった。

## (3) ハーバード大学とMIT

1971年、バーナンキはハーバード大学に入学する。けれども、彼が入学を考えていた大学は、ユダヤ人で最初に合衆国最高裁判所判事になった、L. D. ブランダイス (Louis Demibitz Brandeis: 1856-1941)の名にちなんで、1948年に設立された、ブランダイス大学であった。

バーナンキの両親はコッシャー (kosher) を守り、子供たちは、一緒に住んでいた祖父からヘブル語を学んだほどであったから、<sup>(5)</sup>ブラダイス大学がバーナンキ一家にとっての第一の選択肢であったのは想像に難くない。バーナンキにハーバード大学への進学を勧めたのは、見習いラビ (a student rabbi) であった。当時のディロンにあるシナゴグは小さくてフルタイムのラビを支えることができなかったので、ロシュハナ (Rosh Hashanah) やヨンキプール (Yom Kippur) といったユダヤ教の重要な祭日は見習いラビによって守られていた。ある日の夕食の席で、「私たちがブラダイス大学のことを話していたら、そのラビが、ブラダイス大学にいけるのなら、ベンはハーバード大学にいけるよ、言った」とバーナンキの母・エドナは語っている (Andrews, et. al, [2005])。ブラダイスもまたハーバード大学を1877年に卒業しているのであるから、この見習いラビの一言はバーナンキの心をハーバード大学に向けさせたであろうことも想像に難くない。

バーナンキはハーバードでは物理学を専攻しようと考えていたがまもなく数学専攻に変更し、さらに経済学に変更した。1975年、バーナンキは、ハーバード大学を最優秀 (Summa Cum Laude) で卒業した。経済史で学士号を得ている。1975年にはマサチューセッツ工科大学 (MIT) に進学し、1979年には大不況の研究で<sup>(6)</sup>Ph.Dを取得している。

1978年5月29日、バーナンキはアナ・フリードマン (Anna Friedmann) と結婚した。彼女は、ボストンの近郊のウエルスリーにあるウエルスリー大学 (Wellesley College) を卒業し、のちスタンフォード大学で修士号を取得することになるスペイン語の教師である。

#### (4) スタンフォード大学

1979年、バーナンキは、スタンフォード大学のビジネス大学院で最初の教職を始める。スタンフォードでは、2人の若い独身の経済学者に部屋を貸して、四人が一緒に住んだ。アナはみんなの食事を作った。2人のうちの一人は、後年、バーナンキと何本もの論文を共同で執筆することになる、現在は、ニューヨーク大学経済学教授 (Henry and Lucy Moses Professor of Economics) かつ学部長でもあるガートラー (Mark L.Gertler) である。1982年12月5日には、バー

ナンキ夫妻に息子、ジョエル (Joel) が生まれる。1983年、バーナンキは、スタンフォード大学准教授 (Associate Professor) となる。

#### (5) プリンストン大学

1985年、バーナンキは、プリンストン大学経済学部に移る。1986年6月21日、娘・アリッサ (Alyssa) が生まれる。1994年-96年は、The Class of 1926 Professor of Economics and Public Affairs at Princeton Universityであった。

1996年、プリンストン大学は創立250周年目を迎えた。その年、バーナンキは、The Howard Harrison and Gabrielle Snyder Beck Professor of Economics and Public Affairs<sup>(7)</sup>兼経済学部長となった。

この間、1989年-90年は母校のMIT で、93年にはニューヨーク大学で客員教授 (visiting professor) として経済学を教えた。1987年-98年にはフィラデルフィア連銀の、89年-90年にはボストン連銀の、90年-91年と94年-96年にはニューヨーク連銀の客員研究員 (visiting scholar)、1990年-2002年は、ニューヨーク連銀のAcademic Advisory Panel のメンバーであった。

#### (6) Fed 理事

2002年5月8日、ブッシュ大統領は、バーナンキとコーン (Donald L. Kohn) をFed理事に任命した。バーナンキの任期は、2001年1月31日に辞任したケリー (Edward W. Kelly Jr.) の残任期間 (~2004年1月31日) であった。コーンの任期は、2002年1月31日に任期の切れたメイヤー (Laurence H. Meyer) 理事の後任であるから2016年1月31日までであった。<sup>(8)</sup> 7月31日に上院の同意を得て、8月5日に、バーナンキはコーンとともに理事に就任した。9月、バーナンキは、プリンストン大学を休職した (public service leave)。

2003年9月9日、ブッシュ大統領は、バーナンキを理事に再任する意向であることを発表した。10月24日の上院の同意を受けて、11月14日、再任の宣誓式が行われた (任期は2004年2月1日から2018年1月31日まで)。

#### (7) CEA委員長

2005年5月15日、グリーンSPAN議長は、2006年1月31日をもって、議長を退

任することを表明した。6月21日、ブッシュ大統領は、ローズン (Harvey S. Rosen) の後任として、バーナンキを大統領経済諮問委員会 (CEA) 委員長に指名した。7月1日、バーナンキはプリンストン大学を正式に辞職した。

### (8) Fed議長

10月24日、ブッシュ大統領は、次期連邦準備制度理事会議長としてバーナンキを任命することを発表した。<sup>(9)</sup> 11月15日、上院銀行・住宅・都市問題委員会で公聴会が開かれた。2006年1月31日、上院はバーナンキ議長を承認した。2月1日、バーナンキは第14代連邦準備制度理事会議長に就任した。CEA委員長は1月31日をもって辞任している。<sup>(10)</sup>

## 3. バーナンキの著作活動

前節ではバーナンキの経歴を見てきた。本節ではバーナンキの著作活動を見ることによってバーナンキを理解する一助にしたい (第1表参照)。

もちろん、これらは彼の著作活動のすべてを網羅したものではない。バーナンキや他の人の論文の参考文献リストを参照にして発表年月のわかる範囲で時系列的にまとめたものである。それぞれの著作には通し番号を打ち、番号に続けて、発表年、論文表題 (または書名)、共著者がいる場合はその共著者名、論文の掲載雑誌とページ、単行本の場合は出版社、という順で、記載した。

それぞれの文献の最後に⇒を付して番号が付されている。それは当該文献 (特にNBER Working papers) がどの論文として雑誌に掲載されたか、または論文の場合はどの書物に再録されたかを示している。論文が実際に学術雑誌に掲載されるにはかなりの時間をとる場合があるから、その論文が雑誌に掲載された時点が最初に論文が発表された時点とはいえない。<sup>(11)</sup> 発表時点と雑誌掲載時点との時間的な隔たりを⇒で示している。

### 第1表 バーナンキの著作目録

.....  
(1)1980 "Irreversibility, Uncertainty, and Cyclical Investment" NBER

Working Papers No.0502(July). ⇒(7)

- (2)1981 "Bankruptcy, Liquidity, and Recession" *AER Papers and Proceedings*, Vol.71, no.2(May),155-159.
- (3)1981 "The Sources of Labor Productivity Variation in the U.S. Manufacturing,1947-80", NBER Working Papers No.0712(July). ⇒ (9)
- (4)1981 "Permanent Income, Liquidity, and Expenditure on Automobiles: Evidence from Panel Data", NBER Working Papers No.0756 (Sep.) ⇒ (11)
- (5)1982 "Adjustment Costs, Durables, and Aggregate Consumption", NBER Working Papers No.1038(Dec.)
- (6)1983 "Non-Monetary Effects of the Financial Crisis in the Propagation of the Great Depression", NBER Working Papers, No.1054(Jan.) ⇒ (8)
- (7)1983 "Irreversibility, Uncertainty, and Cyclical Investment", *Quarterly Journal of Economics*, Feb.98(1),115-34.
- (8)1983 "Non-Monetary Effects of the Financial Crisis in the Propagation of the Great Depression", *AER*, Vol.73(June),257-76. ⇒ (78)
- (9)1984 "On the Sources of Labor Productivity Variation in U.S. Manufacturing, 1947-1980," *Review of Economics and Statistics* 65(May), 214-24.
- (10)1984 "The Cyclical Behavior of Industrial Labor Markets: A Comparison of the Prewar and Postwar Eras"(with James L. Powell), NBER Working Papers No.1376(June). ⇒ (19)
- (11)1984 "Permanent Income, Liquidity, and Expenditure on Automobiles: Evidence from Panel Data" *Quarterly Journal of Economics*,99: 587-614.
- (12)1985 "Alternative Nonnested Specification Tests of Time Series Investment Models"(with Henning Bohn and Peter C. Reiss ), NBER Term Papers, No.0049(June)⇒(23)

- (13)1985 "Employment, Hours, and Earnings in the Depression: An Analysis of Eight Manufacturing Industries", NBER Working Papers No.1642(June) ⇒ (16)
- (14)1985 "Banking in General Equilibrium"(with Mark L. Gertler), NBER Working Papers No.1647(June).
- (15)1986 "Alternative Explanations of the Money-Income Correlation", NBER Working Papers, No.1842(Feb.) ⇒ (18)
- (16)1986 "Employment, Hours, and Earnings in the Depression: An Analysis of Eight Manufacturing Industries", *AER*, Vol.76 (March),82-109. ⇒ (78)
- (17)1986 "Agency Cost, Net Worth and Business Fluctuations," (with Mark Gertler), NBER Working Papers, No.2015(Aug.). ⇒ (25)
- (18)1986 "Alternative Explanations of the Money-Income Correlation", in K. Brunner and A. Meltzer, eds., *Real Business Cycles, Real Exchange Rates, and Actual Policies*, Carnegie-Rochester Series on Public Policy, No.25,49-99.
- (19)1986 "The Cyclical Behavior of Industrial Labor Markets: A Comparison of the Prewar and Postwar Eras"(with James L. Powell), in Robert J. Gordon, ed., *The American Business Cycles: Continuity and Change*(University of Chicago Press for NBER). ⇒ (78)
- (20)1988 "Credit, Money, and Aggregate Demand", (with Alan S. Blinder) *AER Papers and Proceedings*, Vol.78(2) (May),435-9.
- (21)1987 "Financial Fragility and Economic Performance"(with Mark Gertler), NBER Working Papers No.2318(July). ⇒ (32)
- (22)1987 *Readings and Cases in Macroeconomics* , McGraw-Hill Inc
- (23)1988 "Alternative Nonnested Specification Tests of Time Series Investment Models"(with Henning Bohn and Peter C. Reiss), *Journal of Econometrics*, Vol.37, No. 2 (March), 293–326.
- (24)1989 "Unemployment, Inflation, and Wages in the American

- Depression: Are There Lessons for Europe?"(with Martin A. Parkinson), NBER Working Papers, No.2862(Feb.). ⇒ (26)
- (25)1989 "Agency Cost, Net Worth and Business Fluctuations," (with Mark Gertler), *AER* Vol.79 (March),14-31.
- (26)1989 "Unemployment, Inflation, and Wages in the American Depression: Are There Lessons for Europe?"(with Martin Parkinson), *AER Paper and Proceedings*, Vol.79 (May),210-14. ⇒ (78)
- (27)1989 "Credit, Money, and Aggregate Demand"(with Alan S. Blinder) NBER Working Papers, No.2534(June). ⇒ (20)
- (28)1990 "On the Predictive Power of Interest Rates and Interest Rate Spreads," NBER Working Papers, No.3486(Oct.) ⇒ (31)
- (29)1990 "The Federal Funds Rate and the Channels of Monetary Transmission"(with Alan S. Blinder) NBER Working Papers No.3487(Oct.) ⇒ (37)
- (30)1990 "The Gold Standard, Deflation, and Financial Crisis in the Great Depression: An International Comparison"(with Harold James),NBER Working Papers, No.3488(Oct.) ⇒ (36)
- (31)1990 "On the Predictive Power of Interest Rates and Interest Rate Spreads," *New England Economic Review*,Nov.-Dec. ,51-68.
- (32)1990 "Financial Fragility and Economic Performance"(with Mark Gertler), Federal Reserve Bank of Boston), *Quarterly Journal of Economics*,105(Feb.),87-114.
- (33)1990 "Procyclical Labor Productivity and Competing Theories of the Business Cycle; Some Evidence from Interwar U.S. Manufacturing Industries" (with Martin Parkinson), NBER Working Papers, No.3503(Nov.). ⇒ (34)
- (34)1991 "Procyclical Labor Productivity and Competing Theories of the Business Cycle: Some Evidence from Interwar U.S. Manufacturing Industries" (with Martin Parkinson), *Journal of*

- Political Economy*, Vol.99, No.31. ⇒ (78)
- (35)1991 "The Credit Crunch"(with Cara Lown), *Brookings Papers on Economic Activity*,Vol.2,205-39.
- (36)1991 "The Gold Standard, Deflation, and Financial Crisis in the Great Depression: An International Comparison"(with Harold James) in R. Glenn Hubbard ed., *Financial Markets and Financial Crisis* (University Chicago Press for NBER ) ⇒ (78)
- (37)1992 "The Federal Funds Rate and the Channels of Monetary Transmission" (with Alan S. Blinder), *AER* Vol.82, No.4 (Sep.) ,901 - 921.
- (38)1992 *Macroeconomics*,1st(with Andrew B. Abel), Addison Wesley
- (39)1992 "Central Bank Behavior and the Strategy of Monetary Policy: Observations from Six Industrialized Countries"(with Frederic Mishkin ),in Olivier Blanchard and Stanley Fischer, eds., *NBER Macroeconomics Annual*,183-238.
- (40)1993 "Central Bank Behavior and the Strategy of Monetary Policy: Observations From Six Industrialized Countries"(with Frederic Mishkin), NBER Working Papers, No.4082(April). ⇒ (39)
- (41)1993 "Credit in a Macroeconomy,"Federal Reserve Bank of New York, *Quarterly Review*, 18(Spring),50-70.
- (42)1993 "How Important is the Credit Channel in the Transmission of Monetary Policy?: A Comment," *Carnegie-Rochester Conference Series on Public Policy*,No.39(Dec.), 47-52.
- (43)1994 "Nominal Wage Stickiness and Aggregate Supply in the Great Depression"(with Kevin Carey),Unpublished(Jan.)⇒ (54)
- (44)1994 "The Financial Accelerator and the Flight to Quality," (with Mark Gertler and Simon Gilchrist) , NBER Working papers, No.4789(July). ⇒ (57)
- (45)1994 "The Macroeconomics of the Great Depression: A Comparative Approach", NBER Working papers No.4814(Aug.). ⇒ (46)

- (46)1995 "The Macroeconomics of the Great Depression: A Comparative Approach", *Journal of Money, Credit, and Banking*, Vol.27, No.1 (Feb.) ⇒ (78)
- (47)1995 "Measuring Monetary Policy," (with Ilian Mihov), mimeo, Princeton University, Feb. ⇒ (68)
- (48)1995 "Measuring Monetary Policy," (with Ilian Mihov), NBER Working papers No.5145(June) ⇒ (68)
- (49)1995 "Inside the Black Box: The Credit Channel of Monetary Policy Transmission" (with Mark Gertler ) NBER Working papers No.5146(June). ⇒ (50)
- (50)1995 "Inside the Black Box: The Credit Channel of Monetary Policy Transmission" (with Mark Gertler ), *Journal of Economic Perspectives*, Vol.9, No.4 (Fall) ,27 - 48.
- (51)1995 *NBER Macroeconomics Annual* (ed with Julio Rotemberg)
- (52)1995 *Macroeconomics* ,2nd(with Andrew B. Abel),Addison Wesley
- (53)1996 "Nominal Wage Stickiness and Aggregate Supply in the Great Depression" (with Kevin Carey), NBER Working papers, No.5439(Jan.). ⇒ (54)
- (54)1996 "Nominal Wage Stickiness and Aggregate Supply in the Great Depression"(with Kevin Carey), *Quarterly Journal of Economics*, Vol.III, No.3(August),853-83. ⇒ (78)
- (55)1996 "What does the Bundesbank Target?"(with Ilian Mihov ) NBER Working papers No.5764(Sep.). ⇒ (64)
- (56)1996 "Inflation Forecasts and Monetary Policy"(with Michael Woodford), unpublished paper, Princeton University, Sep. ⇒ (63)
- (57)1996 "The Financial Accelerator and the Flight to Quality,"( with Mark Gertler and Simon Gilchrist) , *Review of Economics and Statistics*, 78、 1-15.
- (58)1996 "Measurement in the Consumer Price Index : An Evaluation", in

- NBER Macroeconomics Annual* (with Julio Rotemberg, eds.)
- (59)1996 *NBER Macroeconomics Annual* (ed with Julio Rotemberg)
- (60)1997 "Inflation Targeting: A New Strategy for Monetary Policy?"(with Frederic Mishkin) , NBER Working papers, No.5893(July). ⇒ (62)
- (61)1997 "Inflation Forecasts and Monetary Policy"(with Michael Woodford), NBER Working paper No.6157(Sep.). ⇒ (63)
- (62)1997 "Inflation Targeting: A New Strategy for Monetary Policy?"(with Frederic Mishkin) , *Journal of Economic Perspectives*, 11(2),97-116.
- (63)1997 "Inflation Forecasts and Monetary Policy"(with Michael Woodford), *Journal of Money, Credit and Banking*, 29(4),653-84.
- (64)1997 "What does the Bundesbank Target?"(with Ilian Mihov), *European Economic Review*, 41(6),1025-53.
- (65)1997 "Systematic Monetary Policy and the Effects of Oil Prices Shocks"(with Mark Gertler and Mark Watson), *Brookings Papers on Economic Activity*,Vol.1,91 - 142.
- (66)1998 "The Financial Accelerator in a Quantitative Business Cycle Framework," (with Mark Gertler and Simon Gilchrist), NBER Working Papers,6455(March). ⇒ (73)
- (67)1998 "The Liquidity Effect and Long-Run Neutrality"(with Ilian Mihov), NBER Working papers No.6608(June). ⇒ (69)
- (68)1998 "Measuring Monetary Policy" (with Ilian Mihov), *Quarterly Journal of Economics*, CXIII (Aug) .
- (69)1998 "The Liquidity Effect and Long-Run Neutrality"(with Ilian Mihov), *Carnegie-Rochester Conference Series on Public Policy*, No.49.
- (70)1998 *NBER Macroeconomics Annual* (ed. with Julio Rotemberg)
- (71)1998 *Macroeconomics*,3rd(with Andrew B. Abel),Addison Wesley
- (72)1999 "Monetary policy and Asset Price Volatility"(with M. Gertler), in Federal Reserve Bank of Kansas City, *New Challenges for*

*Monetary Policy: A Symposium*, 2001,77-128.

- (73)1999 "The Financial Accelerator in a quantitative Business Cycle Framework" (with Mark Gertler and Simon Gilchrist) in *Handbook of Macroeconomics, Vol.1*, ed. by John Taylor and Michael Woodford, ch.21(1341-93).
- (74)1999 "Monetary Policy and Asset Price Volatility," (with Mark Gertler), Federal Reserve Bank of Kansas City, *Economic Review*, Fourth Quarter, 84(4), 17-52.
- (75)1999 *Inflation Targeting: Lessons from the International Experience*, (with Thomas Lauback, Frederic S. Mishkin and Adam S. Posen ), Princeton University Press.
- (76)2000 "Monetary Policy and Asset Price Volatility"(with Mark Gertler), NBER Working papers No.7558(Feb.). ⇒ (72) (74)
- (77)2000 "Deflation and Monetary Contraction in the Great Depression: An Analysis by Simple Ratios"(with Ilian Mohov) in his *Essays on the Great Depression*, 2000, 108-160.⇒(78)
- (78)2000 *Essays on the Great Depression*, Princeton University Press.
- (79)2000 *Principles of Economics*, 1st.(with Robert H. Frank), McGraw-Hill Irwin.
- (80)2000 *Principles of Microeconomics*, 1st(with Robert H. Frank), McGraw-Hill Irwin.
- (81)2000 "Japanese Monetary Policy: A Case of Self-Induced Paralysis?" in R. Mikitani and A.S. Posen, eds, *Japan's Financial Crisis and Its Parallels to U.S. Experience*, Institute for International Economics.
- (82)2001 "Should Central Banks Respond to Movements in Asset Prices?"(with Mark Gertler), *AER Papers and Proceedings*, Vol.91, No.2 (May) ,252-257.
- (83)2001 "Is Growth Exogenous? Taking Mankew, Romer, and Well Seriously"(with Refet S. Gurkaynak), NBER Working papers

No.8365(July).

- (84)2001 "Monetary Policy in a Data-rich Environment"(with Jean Boivin),NBER Working papers No.8379(July). ⇒ (87)
- (85)2001 *Macroeconomics*, 4th(with Andrew B. Abel),Addison Wesley.
- (86)2003 What Explains the Stock market's Reaction to Federal Reserve Policy?(with Kenneth N. Kuttner),Federal Reserve Bank of New York Staff Reports No.174 (Oct.) . ⇒ (92)
- (87)2003 "Monetary Policy in a Data-rich Environment"(with Jean Boivin), *Journal of Monetary Economics* 50, 525-546.
- (88)2003 *Principles of Economics*, 2nd (with Robert H. Frank), McGraw-Hill Irwin.
- (89)2003 *Principles of Microeconomics*, 2nd(with Robert H. Frank), McGraw-Hill Irwin.
- (90)2004 "Measuring the Effects of Monetary Policy: A Factor-Augments Vector Autoregressive (FAVAR) Approach"(with Jean Boivin and Piotr Elias ), NBER Working papers No.10220(Jan.) ⇒ (97)
- (91)2004 "Measuring the Effects of Monetary Policy: A Factor-Augments Vector Autoregressive (FAVAR) Approach"(with Jean Boivin and Piotr Elias ), Board of Governors of the Federal Reserve System, Finance and Economics Discussion Series,2004-3. ⇒ (97)
- (92)2004 "What Explains the Stock Market's Reaction to Federal Reserve Policy?"(with Kenneth N. Kuttner) ,Board of Governors of the Federal Reserve System, Finance and Economics Discussion Series,2004-16(March) ⇒ (94)
- (93)2004 "What Explains the Stock Market's Reaction to Federal Reserve Policy?"(with Kenneth N. Kuttner),NBER Working papers, No.10402(April). ⇒ (94)
- (94)2004 "Why Does Monetary Policy Affect the Stock Market?", (with Kenneth N. Kuttner),*Journal of Finance*, Vol.60,No.3,1221 - 1258

- (95)2004 "Monetary Policy Alternatives at the Zero Bound: An Empirical Assessment", (with Brian P. Sack, and Vincent R. Reinhart), *Brookings Papers on Economic Activity*(2),1-100.
- (96)2004 *Macroeconomics*, 5th(with Andrew B. Abel), Addison Wesley
- (97) 2005 "Measuring the Effects of Monetary Policy: A Factor-Augments Vector Autoregressive (FAVAR) Approach"(with Jean Boivin and Piotr Eliaszc ), *Quarterly Journal of Economics*, Vol. 120, No. 1 (Feb.) ,387-422.
- (98)2005 *The Inflation-Targeting Debate* (with Michael Woodford, eds.),University of Chicago.
- (99)2006 *Principles of Economics*,3rd.(with Robert H. Frank), McGraw-Hill Irwin.
- (100)2006 *Principles of Microeconomics*, 3rd. (with Robert H. Frank), McGraw-Hill Irwin.
- (101)2006 *Principles of Macroeconomics*, 3rd. (with Robert H. Frank), McGraw-Hill Irwin.
- 

以上の著作目録から気づく点をいくつか指摘しておこう。

第一は、彼の最初の論文は、NBER working papers No.0502である。2004年4月のNo.10402までで33本のWorking Papers と1本のTerm paperをNBERで発表している。<sup>(12)</sup> そのうち3本のWorking papers (文献 (5) (14) (83))を除いた30本が何らかの学術雑誌に掲載されている。<sup>(13)</sup>

論文の発表時期と雑誌 (ないし単行本) 掲載時期に遅れがあるのは、カンファレンスでの発表の場合、注意を要する。文献 (74) の「金融政策と資産価格の変動性」という論文は、1999年8月26日から28日にかけて、ワイオミング州のジャクソン・ホールで開催されたカンサス・シティー連銀主催の"New Challenges for Monetary Policy"というシンポジウムで発表されたものがカンサス・シティー連銀の機関紙に掲載されたのである。カンファレンスで発表された論文と議論が一括して公表されたのは、2001年のことである。バーナンキの考えを2001年に公

表されたシンポジウムの記録で知る人と、シンポジウムに参加した人との間には2年足らずの時間的遅れがあることになる。文献(98)は公刊が2005年である<sup>(14)</sup>けれども、実際は2003年1月にフロリダ州、バル・ハーバー(Bal Harbour)で開催されたNBER主催のカンファレンスの記録である<sup>(15)</sup>。

第二に、バーナンキは、2000年に、それまでの論文を集めて『大不況論集』(文献(78))を公刊した。そこに収録されている論文は、文献(8)、(16)、(19)、(26)、(34)、(36)、(46)、(54)、(77)の9本である。論文の発表年からすれば、1983年から2000年にわたって書かれた論文である。バーナンキは次のように述べている。

「私の研究専攻分野は、マクロ経済学であって経済史ではない。にもかかわらず、学者としての私の経歴を通じて現在では大不況(Great Depression)として知られる1930年代の不安定な経済下落の研究に何度も立ち戻ってきた。私は、ある人たちが南北戦争凝り屋(Civil War buff)であるのと同じように自分は大不況凝り屋(Great Depression buff)ではないかと思う。私にはなぜもっと大不況凝り屋がいないのかわからない。大不況は信じられないほど劇的な出来事であった一株式市場の崩壊があったし、銀行取付けもあった、荒々しい通貨投機もあった。しかもこれらの出来事の背景には不吉な戦争の暗雲が迫っていた時期でもあった。この期間は興味深い悲劇的な性格に満ちていた。……私は大不況を研究するのを楽しんできた。というのも大不況は現代史の中でも岐路となる時期の重要なできごとであるからだ。大不況からは経済の運行に関して学ぶべきことがたくさんある。……大不況が提起してくれた論点は今日でもいまだに重要な論争点である。……大不況の期間は経済政策や経済制度と経済実績との関連を研究するためのすばらしい実験室を与えてくれる。……本書に収録された9つの論文はほぼ20年間にわたる期間にわたって書かれたものであるが、これらの論文を読み返してみても、大不況の原因とその伝播に関して一貫した見方を提供していることを見出してとても喜んでいる」(Bernanke [2000], pp. vii - viii)。

バーナンキが大不況の研究者として知られ、大不況の研究に向かうきっかけの

一つがフリードマンとシュオーツの『合衆国貨幣史』(1963)であったことは前記注6で触れた。大不況に関する研究によって得られた経済の運行に関する見方は、Fedの理事になってからの講演(Remarks)や、具体的政策提言にも反映されている。Fed議長としての今後の金融政策運営においても、これまでの研究から得た知見が何らかの作用を与えると推察することはあながち無謀ではないと思われる。その意味でバーナンキが大不況の出来事から何を教訓として学んだのかを考察することは重要な今後の課題である。

第三に、バーナンキが、マクロ経済学のテキストを書いたのは1992年のことである(文献(38))<sup>(16)</sup>。

その後、1995年、1998年、2001年と版を重ね、2004年にはその第5版が出版されている。2000年には『経済学原理』(文献(79))と『ミクロ経済学原理』(文献(80))が出版され、2006年にはともに第3版が出版されている。2006年には『マクロ経済学原理』第3版も発行されている(文献(99)(100)(101))。これらの第3版においてのバーナンキの肩書きは、「(前) プリンストン大学教授、CEA委員長」となっている。

経済学のテキストが著者独自の考えを前面に出すというよりは、現在の経済学の知識を体系的に整理しそれを学生に伝達することを目的にするのであることを考えれば、バーナンキは、現代の経済学の標準的な知識を身につけていることは明白である。と同時に、バーナンキのテキストで経済学を学んだ学生には、バーナンキという学者は決して疎遠な学者ではなく、経済に対するバーナンキの見方もまったくの未知なものではないであろう。"Who is Ben Bernanke?"と問うことさえ彼らには問題にならないのかもしれない。

第四に、第1表に掲げた文献リストのうち、バーナンキが単独で執筆した論文と書物はあわせて約20本でそのほとんどが80年代と90年代前半に集中している。そのほかの著書はテキストを含めて誰かとの共著である。この点を次節で検討して行こう。

#### 4. バーナンキと学者仲間(学問共同体)

共著書・論文が多いということはバーナンキが特徴ある独自の見解を持ってい

ないとか、他の学者に依存しているということを示すのではなく、共同で仕事ができる性格をもっており、かつ彼の考えが孤立したものではなく学者仲間の中で形成されてきたのであり、共同研究を通じて経済学者仲間の連絡や交友関係が広がっているものと積極的に評価したい。

以下では彼が共同で論文を発表した人々の略歴を見ておこう。取り上げる人名は第1表にあらわれた共著者名の順番である。<sup>(17)</sup>名前に続いて第1表の文献番号が掲げてある。前述したように、同じ内容の論文であっても、NBER Working Papers として発表されたものも学術雑誌の掲載されたものもそれぞれ別の論文として計算した。したがって、実際の共同研究作業の頻度を表すわけではない。

(1) パウエル (James Powell) : 文献 (10) (19) [2本]。

1977年、カルフォルニア大学バークレー校を卒業した (経済学・統計学)。80年、スタンフォード大学でM.S.(統計学)、81年M.A.(経済学)、82年Ph.D.(経済学)を取得した。82年から85年、MITの経済学講師 (assistant professor)、85年にカーネギー・メロン大学客員経済学准教授 (visiting associate professor)、86年にウイスコンシン大学マディソン校の経済学講師となり、87年-90年同校准教授、90-91年同校経済学教授であった。88年にはプリンストン大学で、90年-91年にはシカゴ大学で客員経済学教授として過ごした。91年-96年はプリンストン大学経済学教授となる。現職はカルフォルニア大学バークレー校の経済学教授である。

バーナンキと共同で論文を執筆した1984年-85年は、パウエルがMITで教えていた時期である。バーナンキがプリンストン大学に赴任したのが1985年であるから、パウエルがプリンストン大学客員准教授として過ごした88年、さらにはプリンストン大学教授であった時期、二人は再び若き日の旧交を温めたであろう。96年にはバーナンキは経済学部長に就任している。

(2) ボーン (Henning Bohn) : 文献 (12) (23) [2本]。

現在、2004年のノーベル経済学賞受賞者であるF.キドランド (Finn Kydland) と同じカルフォルニア大学サンタ・バーバラ校の経済学部教授である。主たる研究分野は財政・金融政策であり、社会保障制度に関する専門家でも

ある。彼は2006年1月25日のUCSBの経済フォーラムにおいて、バーナンキたちの編集した書物(文献(75))に基づきながら、"Inflation Targeting: The Future of U.S. Monetary Policy?"という発表をしている。

(3) ライス (Peter C.Reiss) : 文献(12) (23) [2本]。

1977年、ブラウン大学卒業、イエール大学で79年に修士号、82年に博士号を取得した。82年からスタンフォード大学ビジネス大学院に赴任、現在MBA Class of 1963 経済学教授である。バーナンキは79年から85年までスタンフォード大学ビジネス大学院で教えていたのであるから、二人は同僚として共同研究をしたということになる。

(4) ガートラー (Mark Gartler) : 文献 (14) (17) (21) (25) (32) (44) (49) (50) (57) (65) (66) (72) (73) (74) (76) (82) [16本]。

バーナンキとの共同論文が一番多いのはガートラーである。1973年5月ウイスコンシン大学を卒業した後、1978年スタンフォード大学で経済学のPh.D.を取得した。1978年-1981年、コーネル大学講師、1981年秋、ウイスコンシン大学講師となる。1984年秋には同大学准教授となった。1985年の冬学期と春学期をスタンフォード大学ビジネス大学院で客員准教授として過ごす。86年-87年は、客員教授としてプリンストン大学で過ごした。バーナンキは85年に、スタンフォード大学からプリンストン大学に移っていた。89年-90年にはコロンビア大学ビジネス大学院の客員教授であった。90年にはニューヨーク大学教授となり今日に至っている。

ガートラーは1993年には再びプリンストン大学で客員教授として教えた。その年、バーナンキがニューヨーク大学の客員教授として教えている。ガートラーは客員教授として97年をイエール大学で、2002年秋学期にはMITで教えている。1999年-2003年にはニューヨーク大学のC.V.スター応用経済学センター所長を務め、2003年春から同大学経済学部長に就任、今日に至っている。94年から今日までニューヨーク連銀のアカデミック・コンサルタントである。

「バーナンキはおそらくは金融政策を非人格化する (depersonalizing) に向けてすすんでいくであろう」とガートラーはいつている (Andrews et.

al. [2005])。

「金融政策の非人格化」とは、金融政策の運営が例えばヴォルカ - やグリーンスパンといった特定の個人の裁量によって左右される部分を少なくしていくということであろう。しばしば金融政策は技芸（アート：art）であるといわれる。金融政策が政策決定者個人の判断に依存する部分があるのは間違いない。金融政策には、アートという表現をせざるを得ない部分があることは否定できない。アートの部分はどこまでも残る。けれども、金融政策がアートであるということとたれりとはしないことも否定できない。金融政策の「科学的部分」を拡大して「アートの部分」を縮小していくことによって、特定の「名」議長に依存することなく金融政策を策定できるようにしていこうということであろう。具体的には、これまでバーナンキが主張してきた、インフレ・ターゲティングの導入の方向へと進んでいくだろうと、ガートラーは言っているのだと思われる。インフレ・ターゲティングについては別稿を必要とする。

(5) **プリンダー (Alan Blinder) : 文献 (20) (27) (29) (37) [4本]**。

45年10月14日、ニューヨーク市のブルックリンで生まれたプリンダーは67年プリンストン大学を経済学の最優等(Summa cum laude)で卒業し、68年にはロンドン大学でM.Sc.(経済学)、71年にはMIT でPh.D.(経済学)を取得した。71年—76年、プリンストン大学経済学講師、76年—79年同大学経済学准教授、79年—82年同大学経済学教授、82年から現在までGordon S. Rentschler Memorial経済学教授、88年—90年には経済学部長を務めた。90年からは自ら設立したプリンストン大学経済政策研究所の共同所長である。93年—94年にCEAのメンバー、94年6月27日から96年1月31日まで連邦準備理事会副議長を務めた。D.W.マリンズ (David W.Mullins Jr.) の後任として、クリントン大統領(民主党)に任命された。彼の後任はA.M.リプリン (Alice M. Rivlin) であった (99年7月16日辞任)。

バーナンキとプリンダーが共著論文を書いた1988年—90年は、プリンダーが経済学部長であり、1985年にプリンストン大学に赴任したバーナンキにとっては8歳年長の先任教授であった。プリンダーはFed理事退任後、1996年のライオネル・ロビンズ記念講義を行った (*Central Banking in the Theory and Practice*,

The MIT Press,1998)。その講義では「彼は、中央銀行業は適切な知的フレームワーク (intellectual framework) の中でのみ有効に実施されるのであることを力強く議論した」とロンドン大学のR. レヤード (R. Layard) は言っている (*Ibid.*,p.ix)。

(6) パーキンソン (Martin A. Parkinson) : 文献 (24) (26) (33) (34) [4本]。  
2000年の『大不況論集』に収録される1991年の論文(文献(34))における彼の所属はオーストラリア財務省となっている。

(7) ジェームス (Harold James) : 文献 (30) (36) [2本]。

ケンブリッジ大学で教育を受け、82年同大学から経済史でPh.D.を取得する。86年にプリンストン大学に赴任して以来、現在もプリンストン大学教授でありかつウィンドロウ・ウィルソン大学院の国際問題教授である。現代ドイツ史とヨーロッパ経済史を教えている。86年にはドイツの戦間期の不況の研究であるGerman Slumpを、89年にはドイツの国家アイデンティティーの変化の研究であるA German Identity : 1770 - 1990を、96年にはInternational Monetary Cooperation Since Bretton Woodsを、2001年にはThe End of Globalization: Lessons from the Great Depressionを公刊した。

文献 (29) は、バーナンキにとって彼の大不況研究を国際的視野の中におくのにふさわしい同僚との共同研究とってよいだろう。

(8) ローウン (Cara Lown) : 文献 (35) [1本]。

文献(35)での肩書きはニューヨーク連銀となっている。現在もニューヨーク連銀で数多くの論文を発表している。

(9) ハバード (Glenn Hubbard) : 文献 (36) [1本]。

彼はバーナンキの共同研究者ではないが、彼の政治的昇進に大きな役割を果たした、以前のCEA委員長である。58年9月4日、フロリダ州オーランド (Orlando) に生まれたハバードは79年6月、フロリダ大学を最優等で卒業した(経済学)。81年5月にM.A. (経済学)、83年5月にPh.D.をハーバード大学で取

得した。博士論文はThree Essays on Government Debt and Asset Markets である。審査委員は、フリードマン (Benjamin M. Friedman)、ハウスマン (Jerry A. Hausman)、フェルドスタイン (Martin S. Feldstain) である。83年-88年、ノースウエスタン大学講師、88年にコロンビア大学ビジネス大学院の教授になり現在に至っている。94年-97年にはビジネス大学院の首席副部長 (Senior Vice Dean)、94年には、大学院のラッセル・カールソン経済学・財政学教授 (Russell L. Carson Professor) 学に任命され今日に至っている。2004年からは大学院部長 (Dean) である。

この間、91年-93年、財務省の租税分析の副秘書官補 (Deputy Assistant Secretary) を務めた。2001年-2003年にはブッシュ政権に加わり、CEA委員長 (2001年5月31日~2月28日) をはじめ、科学・芸術に関する大統領委員会のメンバー、ホワイトハウスの国家経済会議と国家安全保障会議のメンバーとして活躍した。2001年-2003年はOECDの経済政策委員会の議長でもあった。

バーナンキをFed理事に推薦したのはハーバードであった。バーナンキもハーバードも共和党员である。

(10) アベル (Andrew B. Abel) : 文献 (38) (52) (71) (85) (96) [5本]。

92年にバーナンキと共著で『マクロ経済学』のテキストを書いたアベルは、現在ペンシルバニア大学ワートン・ビジネス大学院金融学部の財政・経済学教授 (Ronald A. Rosenfeld Professor of Finance and Economics) である。74年プリンストン大学を卒業、78年にMITでPh.D.取得する。バーナンキは75年にMITに進学し79年にPh.D. を取得したのであるから、両者はともに経済学を学び研鑽を組み重ねた友であるといっただろう。

その後、ハーバード大学、シカゴ大学で教え、86年にペンシルバニア大学に赴任し現在に至っている。76年にはポルトガル銀行の経済コンサルタントを務め、テル・アヴィル大学やエルサレムのヘブル大学で客員 (visiting appointments) として教えたこともある。89年-92年はフィラデルフィア連銀の客員研究者であった。90年からカーネギー・メロン公共政策カンファレンスシリーズの助言ボードに、93年からはJournal for Money, Credit, and Banking の編集ボードに、94年からはニューヨーク連銀のEconomic Policy Reviewの編集ボードに加わっ

て今日に至っている。2001年以降、議会予算局の「長期モデル策定グループ」のメンバーであり、経済助言パネルのメンバーでもある。

(11) ミシュキン (Frederic Mishkin) : 文献 (39) (40) (60) (62) (75) [5本]。

ミシュキンは、73年、MITを卒業し、76年にはMIT大学院でPh.D.を取得した。75年にMIT大学院に進学し79年にPh.D.を取得したバーナンキにとって彼は同窓の友人である。シカゴ大学やノースウエスタン大学やプリンストン大学で教え、83年にはコロンビア大学ビジネス大学院に赴任した。彼は、連邦準備制度理事会のアカデミック・コンサルタントを務めてきたし、客員研究者として、日本の大蔵省やオーストリア連銀に滞在したこともある。ニューヨーク連銀のアカデミック助言パネルのメンバーでもあった。94年から97年まではニューヨーク連銀の執行副総裁兼研究部長、さらにはFOMCのエコノミスト (associate economist) でもあった。彼の *The Economics of Money, Banking, and Financial Markets* は版を重ね、2004年には第7版が発行されている。このテキストには当然ながらインフレ・ターゲティングの節がある[第6版、pp.521-529]。

ミシュキンはバーナンキ達とともにインフレ・ターゲティングの国際的経験に関する本を99年に書き、2003年のNBER主催のインフレ・ターゲティングに関するカンファレンスでも論文を発表した。04年8月9-10日にオーストラリアのキリビリ (Kirribilli) で開催されたオーストラリア連銀主催のカンファレンス "The Future of Inflation Targeting" において、"Can Central Bank Transparency Go Too Far?" という論文を発表している<sup>(18)</sup>。05年10月20-21日、サンチャゴで行われたチリ中央銀行主催の "Monetary Policy under Inflation Targeting" と題するカンファレンスをチリ中央銀行のK. シュミットヘベル (Klaus Schmidt-Hebbel) とともに組織した。ミシュキンはそのカンファレンスではシュミットヘベルと共同で "Does Inflation Targeting make a Difference?" という論文を発表している。

バーナンキがミシュキンとインフレ・ターゲティングを書いたのが97年である。その後は金融経済学者のミシュキンがインフレ・ターゲティングの精力的な支持者として活躍している。ミシュキンは現在、コロンビア大学ビジネス大学院教授 (Alfred Lerner Professor of Banking and Financial Institutions)

である。

友人であるミシュキンはバーナンキについて次のように言っている。「政策の仕事に入っていったとき多くの学者たちは成功しない。彼らは学者でない一般の人々に語る方法を知らないからだ。しかし、プリンストン大学経済学部長として、またニュージャージー州モントゴメリー・タウンシップの教育委員ボードのメンバーとして、徐々にコンセンサスをえながらモラルを維持するエキスパートである熟練した交渉者(skilled negotiator)という評判を得ていった。これは利子率を設定する職務をバーナンキと分かち他の6人のFed理事と12の地区連銀総裁を誘導していく際に有益であろう技術 (skills) である。スクールボードでの仕事は、先生方との契約交渉にバーナンキを引き込んだ。この経験はバーナンキを政治的に賢く (politically savvy) するのに役立った」と(Andrew et. al.[2005])。

(12) カーレイ (Kevin Carey) : 文献 (43) (54) [2本]。

現在ニューヨーク連銀に所属し、同行のWorking PaperやEconomic Policy Review に数多くの論文を掲載しているエコノミストである。

(13) ギルクライスト (Simon Gilchrist) : 文献 (44) (57) (66) [3本]。

現在ボストン大学経済学部に所属している。文献(66)はバーナンキとガートレットとの3人の共同論文となっている。彼はガートレットと共同でいくつかの論文を書いているので、バーナンキよりもガートレットとの関係が強いのかもかもしれない。

(14) ミホフ (Ilian Mihov) : 文献 (47) (48) (55) (64) (67) (68) (77) [7本]。

92年、南カルフォルニア大学を卒業(経営管理学)し、94年、M.A.(経済学)、96年、Ph.D.をプリンストン大学で取得した。時期的に見て、バーナンキとの共同論文は彼の大学院での研究そして博士論文に関係するものであると推察される、とすれば、バーナンキは無名のミホフを世に出すのに貢献しているのだと見ることができる。プリンストン大学経済学部長として教え子を世に出していくのはひとつの重要な役割であるのかもかもしれない。その後のミホフは96年、フランスのI NSEADに経済学の講師として就職した。2000年-2004年、准教授、04年からは

テニュアー付き准教授となって現在に至っている。この間、96年—97年はプリンストン大学の客員研究者 (Visiting Researcher)、04年5月—05年4月まではコロンビア大学ビジネス大学院の経済学および財政の客員准教授、04年からは、ベルリンにあるドイツ経済研究所 (The German Institute for Economic Research) の研究教授である。彼の研究分野は、マクロ経済学、金融経済学、エコノメトリックス、国際経済学である。

(15) ウッドフォード (Michael Woodford) : 文献 (56) (61) (63) (98) [4本]。

03年公刊された *Interest and Prices: Foundations of a Theory of Monetary Policy* (Princeton University Press) の著者である。彼は77年シカゴ大学を卒業し、80年イエール大学ロースクールを修了した。84年—86年はコロンビア大学経済学部講師、86年—89年シカゴ大学ビジネス大学院のビジネス経済学の講師、89年—90年、シカゴ大学経済学部准教授、92年—95年、同大学教授であった。90年にはプリンストン大学経済学部教授となる (~98年)。98年—2004年まではプリンストン大学の冠教授 (Harold H. Helm '20 Professor of Economics and Banking) となる。04年にはジョン・ベイツ・クラーク政治経済学教授としてコロンビア大学に移り現在に至っている。

バーナンキと一緒に書いた論文は、ウッドフォードのプリンストン大学教授時代のものである。次に彼がバーナンキと一緒に仕事をするのは、インフレ・ターゲティングに関してである。

(16) ワトソン (Mark Watson) : 文献 (65) [1本]。

ワトソンは、ピース短期大学 (Pierce Junior College) とカルフォルニア州立大学ノースリッジ (Northridge) 校で学部教育をおえ、カルフォルニア大学サンディエゴ校でPh.D を取得した。シカゴ連銀やりッチモンド連銀のコンサルタントとして働き、その後プリンストン大学に赴任した。現在はプリンストン大学の経済学及び公共問題教授 (Howard Harrison and Gabrielle Snyder Beck Professor of Economics and Public Affaris) である。彼の研究は時系列エコノメトリックス、経験的マクロ経済学、マクロ経済予測に焦点が当てられている。03年にはハーバード大学教授であるJ. ストック (James Stock) と共

著で、学部学生のテキストとして『エコノメトリックス入門 (Introduction to Econometrics)』を書いている。

(17) ローテムバーグ (Julio Rotemberg) : 文献 (58) (59) (70) (73) [4本]。

75年カルフォルニア大学バークレー校を卒業 (経済学)、81年プリンストン大学で経済学のPh.D.を取得する。80年—96年はMITのビジネス大学院 (Sloan School of Business) でマクロ経済学と国際経済学を教えていた。95年の一年間、ハーバード・ビジネス・スクール(HBS)で客員教授として教えたあと、97年HBSの教授団に加わった。現在はHBSの冠教授 (William Ziegler Professor of Business Administration) である。彼がバーナンキと一緒に仕事をしたのはNBERの仕事であった。ローテムバーグが実質的に共同で研究をしているのはウッドフォードであろう。二人の共同論文がいくつかある。

(18) テーラー (John Taylor) : 文献 (73) [1本]。

「テーラー・ルール」で著名なテーラーである。46年12月8日、ニューヨーク州ヤンカーズ (Yonkers) に生まれた彼は、68年プリンストン大学を最優等で卒業 (経済学)、73年にはスタンフォード大学でPh.D.を取得した。73年—77年講師、77年—79年准教授、79年—80年教授としてコロンビア大学で教えた。80年—84年プリンストン大学経済学および公共問題教授、84年にスタンフォード大学教授 (Mary and Raymond Professor of Economics)、96年にはスタンフォード大学のフーバー研究所上席研究員 (Bowen H. and Janice Arthur McCoy Senior Fellow) になり今日に至っている。

テーラーがコロンビア大学で教えていたときの76年—77年、グリーンズパンが委員長であるCEAの上席スタッフ・エコノミストとなり、77年1月、カーター大統領の就任とともにグリーンズパンはニューヨークにあるタウンセンド・グリーンズパン・コンサルタント会社(T-G社)の経営に再び専念することになる(土井[2006]、65頁)。78年—81年の3年間、テーラーはT-G社の経済分析家としての仕事もしている。81年—84年フィラデルフィア連銀の研究アドバイザー、86年8月には客員研究者としてフィンランド銀行に滞在した。87年日本銀行での客員研究者であった。94年—2001年は日本銀行名誉アドバイザー (Honorary

Adviser) であった。95年—98年カルフォルニア知事の経済助言会議のメンバーでもあった。83年と95年—2001年は連邦議会予算局の助言パネルのメンバーであった。01年—05年は財務省国際問題担当次官(Under Secretary)を務めた。03年—05年は、OECD国際マクロ経済学に関する第3作業部会議長として仕事をした。

テーラーが、Fedがフェデラル・ファンド・レートをどの程度上げ下げすべきかを簡単な式に定式化したのは彼がスタンフォード大学教授であった92年のことである。その後テーラー・ルールに基づく金融政策は活発な研究課題となっていた。

98年、テーラーは、「金融政策ルール (Monetary Policy Rules)」というNBERのカンファレンスを組織する。その記録が99年、NBERのStudies in Business Cyclesシリーズ第31巻として公刊された。このカンファレンスには9本の論文が発表された。バーナンキと共同で*NBER Macroeconomics Annual*を編集したJ.ローテムバーグはM. ウッドフォードと共同で論文を発表している。ガートラー、ミシュキン、当時連邦準備理事会貨幣問題部局局長であるD.コーンも異なった論文に対してコメントしている。

このカンファレンスにバーナンキは参加している気配はないが、カンファレンスの提出された論文等にはバーナンキの論文が引用ないし参考文献に挙げられている。それらは、文献(49)、(61)、(621)、(64)、(74)であった。

(19) ローバック (Thomas Lauback) : 文献 (75) [1本]。

93年ドイツのボン大学を卒業 (経済学)、97年プリンストン大学で経済学のPh.D.を取得した。97年—2000年、カンサス・シティ連銀の経済研究部門のエコノミスト、2003年—2005年は連邦準備局のエコノミスト、2005年以降連邦準備制度理事会の「研究と統計部局」の中のマクロ経済及び数量的研究部門の上席エコノミストである。2003年—2005年までOECDの経済学研究部局のエコノミストでもあった。彼が、インフレ・ターゲティングに関する書物の著者に加わったときは、バーナンキがニューヨーク連銀の客員研究員でありローバックは、博士論文を完成させながら、インターン・シップとしてニューヨーク連銀で働いていたプリンストン大学の大学院生であった。

(20) パズン (Adam Posen) : 文献 (75) (81) [2本]。

パズンとのバーナンキとの関係は、編集者と執筆者の関係であって、共同研究者であるとか共同執筆者というものではない。パズンはハーバード大学から中央銀行の独立性に関する論文でPh.D.を取得して後、92年-93年、ドイツのボッシュ基金研究員 (Bosch Foundation Fellow resident)、93-94年、ブルッキング研究所のオークン記念研究員、94年-97年、ニューヨーク連銀エコノミストであった。97年から、バーグスティン (C. Fred Bergsten) が所長を務める国際経済研究所 (Institution for International Economics : IIE) の研究スタッフとなって今日にいたっている。

彼は、文献(81)が所収されている書物 (IIE 特別報告13) 以外に、05年には、IIEの特別報告書18として *The Euro at Fine: Ready for a Global Role* を単独で編集している。98年にはIIEから *Restoring Japan's Economic Growth* を公刊している。彼には前述のミシュキンや後述のカトナーとの共同論文がある。いずれもインフレ・ターゲティングに関係するものである。

(21) フランク (Robert Frank) : 文献 (79) (80) (88) (89) (99) (100) (101) [7本]。

これらの文献は『経済学原理』と『ミクロ経済学原理』というテキストである。彼は66年ジョージア工科大学を卒業 (数学) し、71年カルフォルニア大学バークレー校で統計学でM.A.を、72年には経済学でPh.D.を取得した。72年9月-78年12月、コーネル大学経済学講師、79年1月-85年12月、同大学の経済学准教授、86年1月-91年6月、同大学経済学教授、91年7月-2001年9月、同大学経済学部のゴールドウイン・スミス経済学、倫理、公共政策教授、現在はコーネル大学ジョンソン・マネージメント大学院のH.J. ルイス・マネージメント教授兼経済学教授である。彼は、92年9月-93年7月までスタンフォードにある行動科学高等研究センターで過ごし、2000年10月-2001年6月まで仏・米基金のアメリカ文明教授 (French-American Foundation Professor of American Civilization) としてパリで過ごした以外ほとんどコーネル大学で過ごしている。バーナンキと共著のテキストはプリンストン大学とコーネル大学でも用いられているのであろうから、フランクとともにバーナンキはよく知られた経済学者であっ

たろう。

(22) ガケイナック (Refet S. Gurkaynak) : 文献 (83) [1本]。

96年トルコのアンカラにあるビルケント (Bilkent) 大学卒業 (経済学)、2001年プリンストン大学で経済学のM.A.、2004年Ph.D.を取得した。文献(82)は掲載された学術雑誌を確認できないけれども、2001年という年を考えれば、彼の修士論文に関係するものであるのかもしれない。2001年-2005年、連邦準備理事会貨幣問題部局のエコノミストであった。Fedのエコノミストとして経済分析をしていく彼にとってはバーナンキによって教えられた経済学を用いたであろうことは想像に難くない。バーナンキは02年8月にFed理事に就任するのであるから、ガケイナックにとっては、心強く感じられたことであろう。

05年には講師として、母校・ビルケント大学経済学部に戻っている。彼は02年、トルコ中央銀行から若手エコノミスト賞を受賞している。先に触れた、チリ中央銀行主催のカンファレンスで、連邦準備理事会貨幣問題部局のレビン (Andrew T. Levin) とマードナー (Andrew N. Marder)、サンフランシスコ連銀経済研究部の スワンソン (Eric T. Swanson) の4人共同で "Inflation Targeting and the Anchoring of Inflation Expectations in the Western Hemisphere" という論文を発表している。

(23) ボイヴィン (Jean Boivin) : 文献 (84) (87) (90) (91) (97) [5本]。

文献 (87) は、2000年10月12-14日に、スイスのゲルゼンシー (Gerzensee) で開催された "Monetary Policy Under Incomplete Information" というカンファレンスのために準備された論文である。彼は、95年フランスのモントリール大学 (Universite de Montreal) を卒業 (B.S.)、プリンストン大学で95年にM.A.、2000年にPh.D.を取得した。1999年にはコロンビア大学ビジネス大学院に加わり、現在准教授である。文献 (84) は、その発表年からして彼の博士論文に関連するものであると推察される。

バーナンキと共同論文を執筆する形をとることで、世に出て行く後押しをもらった、かつての学生たちが、今後執筆する論文にはバーナンキの論文を参考文献に挙げることによってバーナンキの影響を広め、彼らは、バーナンキ (そし

てアメリカの金融政策)の抱える現在の課題をバーナンキに代わって研究していくことであろう。Fed議長としてのバーナンキは一時的に研究の一線から退いたように見えても、バーナンキは研究課題そのものと対峙し、研究課題を提供する中心にいるという意味で現代の研究の最前線にいると見ることはできるのではなかろうか。

(24) エリアズ (Piotr Elliasz) : 文献 (90) (91) (97) [3本]。

現在、プリンストン大学大学院経済学部所属である。若い学生を世に出すきっかけとしてバーナンキがその論文に名前を連ねたのであろう。文献(90)は2003年NBER Summer Instituteでも報告されている。実際の発表にはポイヴィンとエリアズの二人で行ったのであろうと思われる。バーナンキはすでにFed理事であったからだ。

(25) カトナー (Kenneth K. Kuttner) : 文献 (86) (92) (93) (95) [4本]。

82年9月カルフォルニア大学バークレー校卒業(経済学)、89年3月、ハーバード大学からPh.D.を取得した。博士論文は恒常所得仮説が消費と貯蓄に対しても持つ意味合いを分析した『消費と貯蓄に関する論考 (Essays on Consumption and Savings)』である。

86年3月には、総裁やスタッフに対して準備会計(reserve accounting)や信用政策や金融政策についての助言をするためボリビア中央銀行に滞在した。88年-95年はシカゴ連銀上席エコノミスト兼副総裁付(Assistant Vice President)としてFOMCでのブリーフィング・プロセスを管理運営した。92年にはウイスコンシン大学で客員准教授として教えた。95年-97年はニューヨーク連銀で研究活動と金融政策に関する研究部長を務めた。97年-2003年はニューヨーク連銀の副総裁付であった。ニューヨーク連銀はFOMCの常任メンバーである。98年-2003年、FOMCの国内研究機関のためにブリーフィング・トピックスの調整者であった。ニューヨーク連銀では*Economic Policy Review*の編集者(Associate Editor)でもあった。

その間、95年-2000年はコロンビア大学ビジネス大学院で教えた。95年-97年は客員講師(Visiting Assistant Professor)として、97年-2000年は兼任教

授 (Adjunct Professor) としてである。99年-2001年は兼任教授としてニューヨーク大学でも教えた。02年には、IMFのコンサルタントとして、インフレ・ターゲットのためのマクロ経済モデル作成の方法についてのワークショップに貢献した。

04年ニューヨーク連銀を辞して、オベリン大学経済学教授 (Danforth-Lewis Professor) になり現在に至っている。同時に04年からはNBERの大学研究員 (Faculty Research Fellow) でもある。前述のオーストラリア連銀主催のカンファレンスでは "A Snapshot of Inflation Targeting in its Adolescence" という論文を発表している。

(26) ザック (Brian P. Sack) : 文献 (95) [1本]。

97年MITでPh.D.(経済学)を取得し、97年からFed理事会に就職し現在に至っている。学術雑誌への掲載論文も数多くある。"Extracting the Expected Path of Monetary Policy from Futures Markets" という論文が *Journal of Futures Markets* に掲載されることになっているし、コーン理事との共同論文 "Central Bank Talk: Does it Matter and Why" がカナダ銀行からまもなく発行される *Macroeconomics, Monetary Policy, and Financial Stability* に掲載される予定である。

(27) レインハート (Vincent Reinhart) : 文献(95) [1本]。

78年にフォードム大学 (Fordham Univ.) を卒業し (経済学)、82年コロンビア大学でM. Phil.を取得した。87年-88年、ニューヨーク連銀上席エコノミスト、88年に連邦準備制度理事会に就職し現在に至っている。99年-2001年は理事会の国際金融部門の副部長、現在は金融問題部局の部長である。

以上は、バーナンキが共同で論文やテキストを執筆したり、編集をした人々の簡単な経歴である。これらの人々はバーナンキの同窓(ハーバード大学やMIT)であったり、友人であったり、プリンストン大学の同僚であったり、教え子であったりする。これらの人々の年齢もさまざまである。彼らは自分の論文の参考文献リストにバーナンキの論文をあげることもあろう。バーナンキの名は彼と共同研

究をした人々を超えて広がっていくことであろう。さらにはプリンストン大学で20年近くも教鞭をとってきたバーナンキである。プリンストン大学には米国国内だけでなく世界の各地から勉学に來た学生もいる。彼らの中には、経済学者として教職についている人たちもいるであろうし、それ以上の数の学生が卒業後、実業界に出て行った。その卒業生は全世界に広がっているといってもいいだろう。ハーバード大学、MITの卒業生もまた間接的にバーナンキに関心を持つことであろう。

このような経済学の学問の世界での人的つながりは、グリーンズパンにはなかった特長であろうと思われる。このことはバーナンキにとって大きな資産であると考えられる。

もちろんこのことが現実の金融政策運営にとってどのような影響を与えるかは定かではない。けれどもバーナンキが経済をどのような理論的枠組みの中で考えているのかは、彼のこれまでの著作活動を見ることによってかなり理解可能なのではなかろうか。インフレ・ターゲティングに関する彼の主張も以前から知られている。民間経済主体に無用な憶測や予測をもたらすことがないように、できるだけ金融政策に透明性を与えることは、一般的に「ルール」による金融政策の狙いでもある。Fed議長の考え方がかなりはっきりと理解されることは、金融政策に「透明性」をもたらすだけではなく、そのことを通じてき金融政策の効果を高めることになるのと言いうるかもしれない。

具体的な金融政策の決定は最終的にはFOMCの決定による。Fed議長の考え方がわかるということはFOMCの議論と結論がかなり明確に予測できるということでもあろう。もちろん、FOMCの議論とその方向性と結論を予測するためにはFOMCのメンバーであるバーナンキ以外の6人のFed理事と12の地区連銀総裁の考え方を知る必要がある。けれども、Fed理事会にも地区連銀にもそれぞれに経済研究部門がある。そこには多くのエコノミストが研究活動を行っている。かれらの研究成果に基づいた経済状況の把握とそこから導かれる政策判断がFOMCの議論の基礎データとなる。理事会や地区連銀の研究部局のエコノミストはプリンストン大学を初め、ハーバード大学、MIT、コロンビア大学、スタンフォード大学、シカゴ大学といった優れた経済学博士を育成している教育機関の卒業生である。彼らはバーナンキのテキストで経済学を学んだのかもしれないし、彼ら

の指導教員自身がバーナンキのテキストや論文で学び、今、現在、次の世代に経済学を教えているかもしれない。とすれば、次々とバーナンキの考え方や金融政策についての理解が広がっていくことも想像できる。経済学の考え方や金融経済の知識を持った人々が増えていくことが実際の金融政策の効果を高めていくことができるのだと考えるならば、インフレ・ターゲティングを導入する議論と同様に、経済学者としてのバーナンキの考え方がはっきり理解できることは金融政策の透明性を高めることに貢献をするのではないかと思われる。いわば金融教育の一環と考えることも許されるのではないだろうか。

## 5. おわりに

これまで、バーナンキの経歴、著作とその共同執筆者の略歴を紹介してきた。"Who is Ben Shalom Bernanke?"という問いへの何らかの答えを見出せるのではないかと考えたからである。さらには、新しいFed議長のこれまでの経歴を知ることは今後のアメリカ金融政策の理解に資するのではないかと期待しているからである。

人は経済学者に生まれるのではなく経済学者になっていくのである。バーナンキもFed 議長としての職務を負う中でFed議長になっていくのであろう。本稿のおわりの言葉は、バーナンキ自身に語ってもらおう。

「私は、これまで、自分は、学問の世界にずっと生きていくのだろう (academic lifer) といつも思っていました。大学からすぐに大学院に進学し、大学院を卒業したとき、学問の世界以外での仕事は考えもいたしませんでした。2002年8月、(連邦準備制度理事会の) 理事に任命されるまでの、私の大人としての仕事の経験は、スタンフォード大学のビジネス大学院 (School of Business) で6年間、プリンストン大学での17年間 (経済学部とウッドロー・ウイルソン公共政策大学院との共同任命) 教えたこと、さらには (私の卒業した大学院である) MITを含む機関の訪問ファカルティ・メンバーとして過ごした数年間でしかありません。私の政治的な経験はあわせてみれば、地区の教育委員会 (local education board) での2期、つまり、私も含め他のメンバーが、怒れる親御さんや怒れる納税者に交互にずたずたにされる疲れきった6年間しかありませんでした。行政的側面

をいえば、プリンストン大学経済学部の学部長としての7年間を勤めたに過ぎません。学部長としては、学部のコーヒアワーにベーグルを出すのかそれともドーナツを出すのかといった主要な政策決定の責任を持っていました。……この新しい仕事が与えてくれた知的挑戦は、学者として出会った知的挑戦と同じように実り多きものであったことを、本日、皆様にご報告できますことを私はとてもよろこんでいます。連邦準備の責任はとても広い範囲にわたります。金融政策だけではなく、銀行の規制や監督、支払いシステムの監視、金融上の取り扱いにおける消費者保護規制の策定と実施、一般的な金融安定の促進といったことが含まれます。このような多様なトピックスに関する知識を早く吸収していくには、集中的な努力を必要としました。私が吸収しなければならなかったものの多くは、制度上の詳細でありました。そのうちのあるものは興味深いものでありましたがあるものはさほどではありませんでした。けれども『悪魔は詳細に宿る』という格言がすべての重要な政策上の仕事に対して大きな力をもって当てはまることを理解ようにもなりました。私のこれまでの学問上の訓練は、法的、手続き上の、かつまた制度上の詳細が依存する基礎にある観念上の枠組 (underlying conceptual framework) に常に焦点を向けるように誘導することによってとても役立ってきた。基礎的枠組 (underlying framework) を銘記することによって、何が問題であるかを理解し、どの政策案件に関しても理に適う一貫した決定をすることが、よりたやすくなっていると思うのです。もちろん、どんな政策案件であれ、容易な問題というものはないものですが。……私は、消費者金融規制の問題同様、銀行監督政策における重要問題を理解するのに私の学問上のバックグラウンドがとても役立っていることがわかりました。私はFedの幅広い政策活動にかかわってきたことをとても楽しんできました。けれども私の専門のバックグラウンドはマクロ経済学と金融経済学でありますので、Fedでの仕事の中で私がもっとも興味を引く側面は金融政策でありました。ここでも、私の学問研究時代 (academic days) に積み重ねられた知識や思考習慣がとても有益でありました。たとえば、連邦準備のスタッフによって用いられているモデルや予測方法は、何十年もの学問研究の成果に大きく依存しておりますので、それには私はとても親しみを感じております。(中央銀行でか他の非学問研究機関でなされた技術的な研究を含めた) 学問研究 (academic research) はまた金融政策決定者の多くの戦略的側面に直接かかわっております。たとえば、FOMC は、最近FOMC のコミュニケーション戦略を発展することに従事してきました。これは私が決定的に重要であると信じており、さまざまな機会にお話してきているトピックスであります。この点や金融政

策の他のさまざまな側面意) についての私の考え方は金融政策に関する今日の研究に強く影響されており。このことは私のこれまでの講演における引用や注によっても理解いただけることでしょう」(Bernanke [2005])。

## 注

- (1) Andrews et. al. [2005]は、"ber-NANK-ee"と発音するといっている。土井[2006]、注1 参照。
- (2) アトランタ連銀は、バーナンキの経歴を紹介する短い文章の標題を"New Fed Chair Has Southern Roots "としている (Financial Update ,First Quarter 2006、<http://www.frbatlanta.org/invokle.cfm?objectid=796C0Bff-5056-9F06-990E8B26009FE3E6&me>)
- (3) バーナンキとフリードマンの家族が「ユダヤ人」であるという文献は確認できない。けれども、本文で記述するバーナンキの経歴と二人の子供にバー・ミツバ (bar mitzvah) とバト・ミツバ (bat mitzvah) を受けさせているということから (Andrews,et.al,[2005])、そのように判断した。
- (4) "About Ben and Anna Bernanke"  
([http://marrige.about.com/od/politics/p/bernanke\\_p.htm](http://marrige.about.com/od/politics/p/bernanke_p.htm))
- (5) バーナンキは、ラビの助けを受けることなく、彼の息子であるジョエル (Joel) がバー・ミツバ (bar mitzvah) を、娘のアリッサ (Alyssa) がバト・ミツバ (bat mitzvah) の式を、ヘブル語で執り行うことができるように子供たちにヘブル語を教えるのに十分なヘブル語を祖父から習った (Andrews et.al.) (<http://www.nytimes.com/2005/10/26/business/26fed.html?ei=5090&en=d73cf2f49a>)。

バーナンキは、ミルトン・フリードマンの90歳の誕生日を記念して開催されたシカゴ大学での講演で次のように語っている。「私が最初に、(フリードマンとシュオーツの)『合衆国貨幣史』を読んだのは、MITの大学院時代に早い時期である。私は釘付けになった (hooked)、それ以来、金融経済学 (monetary economics) と経済史の研究者となった。他の多くの学生も私と同じような経験をしていると思う。それゆえ彼らの『貨幣史』が現代の金融経済学に及ぼした直接的間接的影響を誇張することなど困難である」(Bernanke,"On Milton Friedman's Ninetieth Birthday"Nov.8,2002) "彼はこ

の引用文の最初の文に注記して次のように述べている。「ですから、読者は以下の参考文献の中に私の論文を沼山上げていることをお許しいただけるものと思う。私自身の研究がフリードマンとシュオーツの研究課題から導かれたものを追求してきたがゆえに、私の論文を参考文献に挙げたのであります」。13本の参考文献のうちバーナンキの論文は以下の4本である。いずれも、Essays on Great Depression(2000)に収録されている。

①"Non-Monetary Effects of the Financial Crisis in the Propagation of the Great Depression"

(1983)、②"The Macroeconomics of the Great Depression: A Comparison Approach"(1995)、③"Nominal Wages Stickiness and Aggregate Supply in the Great Depression" (with Kevin Carey) (1996)、④"The Gold Standard, Depression, and Financial Crisis in the Great Depression : An International Comparison"(with Harold James) (1991)。なお、2006年6月9日には、MITの第140回めの卒業式に招かれ、式辞を述べている。

- (7) 97年、バーナンキは、アメリカ連邦航空局から民間のヘリコプターを操縦する免許を取得している。それ以前の4年間、週末訓練を受けていたのである。
- (8) 2006年4月28日に辞任したファーガソン副議長に代わって、現理事コーンを副議長に任命する意向をブッシュ大統領が発表したのは5月18日である。6月19日、上院で承認を受けて、6月25日にコーン副議長就任の宣誓式が行われた。
- (9) グリーンスパンが退任を表明した後、次期Fed議長として、供給サイド経済学の支持者たちは、ハーバードCEA委員長を押し、ホワイトハウスの他の高官たちは、ハーバード大学教授で、NBER の会長であるM.フェルドスタイン (Martin Feldstein) に傾いており、グリーンスパン自身はコーン理事を密かに押した、といわれている (Andrews et.al.[2005])。
- (10) 2006年4月28日、ラジアー (Edward P. Lazear) がバーナンキの後任として、CEA委員長に就任した。彼は現在、スタンフォード大学ビジネス大学院の教授であり、フーバー研究所の上席研究員である。
- (11) 例えば、文献番号 (84) の論文は、雑誌の発行は2003年であるが、論文の受け取り (received) は2000年8月1日、受理 (accepted) は2002年9月となっている。
- (12) バーナンキのWorking Paper の題名については、<http://papers.nber.org/papers/> を参照した。

- (13) その3本の論文も何がしかの雑誌に掲載されているかもしれない。筆者には今の時点でそれを明示できないだけであろう。たとえこの3本の論文が学術雑誌に掲載されていないとしても、それらの論文に盛り込まれた内容や主張はバーナンキの考えの中に吸収されていると考えることができる。
- (14) そのカンファレンスでは、当時の日本銀行の山口副総裁が"Asset Price and Monetary Policy: Japan's Experience" と題して発表している。参加者名簿をみると各国の中央銀行家に混じって日本銀行アメリカ支店長のHorii Akinari氏が参加している。
- (15)バーナンキはミシュキンと連名で"Introduction" (pp.1-10) を書き、シンポジウムに提出された論文を要約しながら自分たちの考えを述べている。ミシュキンはこのカンファレンスでの論文発表者の一人でもあり、バーナンキは発表された論文のひとつのコメントーターでもあった。バーナンキとミシュキンは1997年以来、インフレ・ターゲティングに関する論文や書物(文献(60)、(62)、(75))を執筆していることを考えれば、この二人がアメリカにおけるインフレ・ターゲティングの支持者であることは容易に想像できるのである。
- (16) バーナンキは、プリンストン大学に赴任した2年後の1987年に学部のマクロ経済学のクラスのための副教材を編集している(文献(22))。その序文で彼は次のように述べている。「本書に収録された39本の読み物(readings)は、いずれも、ドーンブッシュ(Radiger Dornbusch)とフィシャー(Stanley Fischer)の『マクロ経済学』第4版レベルの、学部でのマクロ経済学を教えるのに役立つようにと考えて選ばれている。これらの読み物は現代のマクロ経済学のさまざまな分野を網羅している。これらの分野には理論的概念(時間不整合性time inconsistency、とか実物的景気循環とか賃金の硬直性の原因等々)、政策上の論争(金融政策におけるルール対裁量とか経済成長の鍵としてのサプライ・サイダー経済学対産業政策)さらには最近のマクロ経済の進展(1980年代のデスインフレーションとか財政赤字と貿易赤字の問題)といった分野を含んでいる。」(文献(22)、p.ix) この副読本は5部構成である。第1部は「計測(measurement)」,第2部は「財政政策、貯蓄、投資」、第3部は「貨幣と金融政策」、第4部は「インフレーション、失業、成長」、第5部は「国際マクロ経済学、貿易、発展」である。第3部にはフリードマンの"The Case for Overhauling the Federal Reserve"(1980)が含まれているが、第4部に"The Role of Monetary Policy"(1969)は含まれていない。

後者の論文は、06年2月24日、プリンストン大学でバーナンキが行った、Fed議長になって最初の講演"The Benefits of Price Stability"で、インフレーションと失業の関係に関する考えを根本的に変えたものとして、重視しているに論文であるが。1980年代前半の段階では、フリードマンの考えが学界においてはまだ共有財産になっていなかったものと推察される。フリードマンの前者の論文については土井[1995]、後者の論文に関しては土井[1981] [1984] を参照。

(17) 文献 (18) のK.ブルナーとA. メルツァーの略歴については、土井[2004]を参照。

(18) この論文は、NBER Working Papers No.10646 として2004年に発表されている。なおこのカンファレンスへの日本からの参加者である伊藤隆敏東京大学教授が"Inflation Targeting and Japan: Why has the Bank of Japan not Adopted Inflation Targeting?"という発表を行っている。伊藤氏は2004年、ミシュキンと共同でNBER Working Papers No.10878 として"Two Decade of Japanese Monetary Policy and the Deflation Problem" と題する論文を公表している。

## 参考文献

- (1) Andrews, Edmund L., David Leonhardt, Eduardo Porter and Louis Uchitelle[2005], "At the Fed an Unknown Became a Safe Choice" *The New York Times*, Oct.26.
- (2) Bernanke, Ben[2004], "Financial Access for Immigrants: The Case of Remittances", at the Financial Access for Immigrants: Learning from Diverse Perspectives conference, Federal Reserve Bank of Chicago, April 16.
- (3) Bernanke, Ben[2005], "Panel Discussion: The Transition from Academic to Policymaker", at the annual Meeting of the Economic Association, Philadelphia, Pennsylvania, Jan.7.
- (4) 土井省悟 [1981]、「M.フリードマンと労働市場－自然失業率仮説を中心に－」、『金融学会報告53』19－28頁。
- (5) 土井省悟 [1984]、「貨幣と経済（2）－マネタリストの主張－」、内橋吉朗編著『金融の理論と実際』春秋社、23－41頁。
- (6) 土井省悟[1993]、「経済、経済学、経済政策－経済学における価値判断－」、四国学院

大学『論集』、第84号(12月)、87-106頁。

- (7) 土井省悟 [1995]、「M.フリードマンの貨幣制度改革論—Mx%ルールからH<sub>0</sub>%ルールへ—」四国学院大学『論集』第89号(12月)、67-88頁。
- (8) 土井省悟[2004]、「『連邦準備史』(2003)と『合衆国貨幣史』(1963)—ブラナー、メルツァー、シュオーツとフリードマン—」四国学院『論集』第114号・115号(12月)、1-64頁。
- (9) 土井省悟[2005]「金融政策と経済学者」四国学院『論集』第116号(3月)、77-109頁。
- (10) 土井省悟[2006]、「アラン・グリーンズパン」四国学院『論集』第119号(3月)、45-68頁。
- (11) Rolnick, Art[2004], "Interview with Ben S. Bernanke, "Federal Reserve Bank of Minneapolis, *The Region*, June.